

今年日本ラグビーにとって画期的な年になる。9月20日から11月2日まで、日本で初めてワールドカップが開催される。

「これをきっかけに、日本のラグビー界がもっと活性化して、ラグビー人口が増えてくれるといいですね」

柔和な笑顔でそう話す林敏之さん。元ラグビー日本代表選手で、キャプテンを務めたこともある。世界で最も通用したラグビー選手としても名高い。

ラグビーを始めたのは城西中学のとき。それまではサッカー少年だった。小学5、6年生で構成されているサッカースクールに毎週通い、6年生を飛び越えてレギュラーの座も掴んでいた。

「僕、子どもの頃からすごく劣等感が強くて、人と話をするのが苦手で、友だちをうまくつくれなかったんです。サッカーではレギュラーだったけど、いつも僕ひとりだけ浮いてるような気がしていました」

そんなときに中学の体育の授業でラグビーに出会う。

ラグビーは体と体をぶつけ合いながら試合を展開するスポーツ。

「ラグビーをやってみて、スクラムを

組んだり、ボールを取り合ったり、体と体をぶつけ合ったりと、人と積極的に関わられるスポーツだと分かって、僕がやりたかったのはこれだと思ったんです」

2年のときにラグビー部に入部。サッカーの楽しさとは比べ物にならないほど楽しかった。ラグビーでもすぐに頭角を現し、城北高校時代には「セレクション合宿」メンバーにも選ばれた。

「僕はずっと、鮮やかな自分」に憧れていたんです。思い描く理想の活躍ができる自分になりたいと思ってました。それがラグビーでは実現できるんじゃないかと思えましたね」

高3の夏。オーストラリア遠征のメンバーに選ばれた。コーチはテレビドラマ『スクール☆ウォーズ』のモデルになった伏見工業高校の山口良治氏。

遠征先で、日本代表のシンボルマークでもある桜の花のマークを付けたジャージを着たとき、「日本の代表やで」と言われたこと、更にはロッカーズに全員集められて手を繋がされ、「み

んな待ってるぞ。おまえらが勝ったという連絡、待ってるぞ」と檄を飛ばされ、身が引き締まる思いだったと言う。

そして負けたときには「同じ人数で、同じ高校生だろ。悔しくないのか」と厳しい言葉で鼓舞させてくれた。

遠征では全員が個別にホームステイ滞在をしていたのだが、いよいよ日本に帰国するという最後の日、山口氏から「外人に通用したのはお前だけだった。オレのあとを継いでくれよ」と言われる。

「まさかそんな言葉をかけてもらえるなんて思ってもみなかったし、本当に嬉しくて、先生に抱きついて泣きました」と振り返る。

その遠征前の強化合宿では、元日本代表監督で同志社大学監督でもあった岡仁詩氏から高校卒業の進路を聞かれた。「同志社に来ないか、と誘っていただけでした。日本一を取ろうぜと言われて」

当時、日本一のタイトルは早稲田、明治、慶応が持っていたが、同志社は優勝することがなかった。

関東の壁を破るという目標を持って同志社進学を決めた。